ウェズレー・C・ミッチェルのソースタイン・B・ヴェブレン観

齋　藤　宏　之

I　ヴェブレンとミッチェルの制度主義

制度学派は，アメリカの知的所産であり，経済思想にも顕著な貢献を果たした．従前のニュートン物理学に由来する静態均衡の概念[1]に代えて，近代経済を特徴づける動態過程の概念を用いることにより，経済学を文化科学と捕らえるに至った．文化の経済的側面を分析する際，社会が参与者の要求を満たすのに必要とする財・サービスの流れに注意した[2]．制度学派は，ソースタイン・B・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen）が1900年頃に創始し，1920年代から30年代にかけて広範に承認を得るに至った[3]．マルコム・ラザフォード（Malcolm Rutherford）が述べるように，両大戦期間，「アメリカ経済学の比較的多種多様な主流であったもののなかでも極めて重要な部分[4]」となった．しかしながら「1944年までには，……当時の制度主義の大物，クレアランス・エアーズ（Clarence Ayres）は，新古典派の主流派が制度主義の接近方法に対して勝利を得たことを認めた[5]．」けれども制度学派はその後紆余曲折を経ながら現在まで続いているし，最近では復活の兆しすら見せている．制度学派が1920年代に正統派経済学に対して行った批判の多くは，現在でも妥当であるようにみえるし，正統派経済学をめぐる懸念が制度学派の伝統を育んでいるといえよう[6]．

制度学派の成立基礎を築いたヴェブレンは，E. K. ハント（E. K. Hunt）が指摘したように，「アメリカ史において，おそらく最も重要で独創的で学殖の深い社会理論家[7]」といってよいであろう．

---

1) Cf. William Easterly, *The Elusive Quest for Growth: Economists' Adventures and Misadventures in the Tropics*（Cambridge, Mass.: MIT Press, 2002）.

2) Allan G. Gruchy, *The Reconstruction of Economics: An Analysis of the Fundamentals of Institutional Economics*（New York: Greenwood Press, 1987）, p. ixx.

3) Cf. Joseph Dorfman, *The Economic Mind in American Civilization*（New York: Augustus M. Kelley・Publishers, 1969）, Vol. 4, pp. 352-353; Geoffrey M. Hodgson, "Institutional Economics," in *A Companion to the History of Economic Thought*, edited by Warren J. Samuels, Jeff E. Biddle, John B. Davis（Malden: Blackwell Publishing, 2003）, p. 462.

4) Malcolm Rutherford, "American Institutionalism and its British Connections," *European Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 14, No. 2, June, 2007, pp. 291-292.

ラザフォードは，またこうも述べている．

「……肝要なのは，両大戦期間，制度主義は主流から外されてはいなかった点に注意を払うことである．制度主義者たちは，経済学の一流のジャーナルにおいて定期的に研究成果を発表していたし，主たる研究大学で地位に就いていたし……，研究・教育機関を創設するのに意欲的に取り組んでいたし，資金援助機関と見事に結びついていたし，政策決定に深く関与していたし，アメリカ経済学会（American Economic Association）やアメリカ統計協会（American Statistical Association）の会長も務めた．言い換えれば，制度主義はアメリカ経済学の『主流』の一部であったのは確かであった．」Malcolm Rutherford, *The Institutionalist Movement in American Economics, 1918-1947: Science and Social Control*（Cambridge: Cambridge University Press, 2011）, p. 7.

5) Alan Hutton, "Institutionalism: Old and New," in *Encyclopedia of Political Economy*, edited by Phillip Anthony O'Hara（London: Routledge, 1999）, p. 532.

6) M. Rutherford, *The Institutionalist Movement in American Economics*, p. 354.

7) E. K. Hunt, *History of Economic Thought: A Critical Perspective*（Belmont: Wadsworth Publishing

経済学が近代科学となるには，進化論的でダーウィン主義的であらねばならないとした上で，ダーウィン以降の近代科学は，因果関係の過程，つまり一次的原因と確定的結果との間の不安定性や過渡期を重視し，連続した累積的変化の過程の理論を立てるまでになったという．そしてこの変化は，自己継続的あるいは自己増殖的で，最終的限界点を有していないと述べる[8]．

ヴェブレンは，進化論的科学が，過程，展開的な連鎖，あるいは累積的因果関係について理論を立てると考える．このように因果が累積的性格を帯びているおかげで，進化論者は，因果の中立の非人格的な連鎖が理論を立てるためにどのように使用できるか示してきたと捕らえる[9]．

この見地に基づき，ヴェブレンは制度変化が選択的過程であり，この過程は主に人間の思考習慣が変化しつつある環境に順応するものであると考える[10]．変化しつつある環境は，生計を立てる様式が変化することであり，科学技術の変化が引き起こすと捕らえる．こうして制度，人間性，科学技術の関係の把握を試みる．ケン・マコーミック（Ken McCormick）は次のように平易に説明する．

「制度は社会の遺伝子である．この遺伝子は長い期間をかけて自らを複製する．社会の遺伝子は相対的に安定している．これが保証することは長い期間にわたる社会の安定である．各世代は前の世代から伝わる制度をほとんど身につけている．それにもかかわらず突然変異が起こる．主として，科学技術の変化が引き起こす．科学技術の変化は，それ自体，あてもない好奇本能や製作本能が生み出す．新しい科学技術は新しい機会や新しい問題を作り出す．その機会や問題の双方が原因で習慣的行動が変化しうる．長い期間にわたって小さくても多くの変化が及ぼす累積的影響は革命的である[11]．」

そして，ヴェブレンの「最も優秀な学徒[12]」がミッチェルである．ミッチェルは，「経済学に恒久的な強い影響を残している[13]」ヴェブレンの方法論の本質を的確に捕らえているものの，その方法論に基づくヴェブレンの制度変化の理論は「経験的には真実であることを確かめられない[14]」思弁に依存していると評する．科学技術を枢軸とする制度変化を重視することなく，当時の経済体制の喫緊の問題に取り組んでいる．企業循環の実証的な研究に専念し，その成果を1913年に最高傑作と言われている『企業循環』（*Business Cycles*）にまとめた後も，1920年に全米経済研究所を創設し，25年間にわたって企業循環を柱とする研究を指揮した．

そこでミッチェルは，制度が思考習慣に及ぼす影響をめぐるヴェブレンの考えを量的方法と結びつけた．つまり制度的な見方に量的・統計的方法を関連づけた．大衆行動を研究し，「量的に研究すると制度問題を特に好むものである．制度は行動を規格化し，それによって統計的処理を容易にするからである[15]」と考える．制度は人間行動を規格化するので，有効に一般化する導入部を作るからである[16]．こうして「経済学は将来，量的側面上でより実り豊かに発展する．経済学者は今日，

Company, 1979), p. 300.

8) Thorstein Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization and Other Essays* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1990), pp. 37-38.

9) *Ibid.*, pp. 58-61.

10) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions* (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1975), pp. 188-190.

11) Ken McCormick, *Veblen in Plain English: A Complete Introduction to Thorstein Veblen's Economics* (New York: Cambria Press, 2006), p. 126.

12) J. Dorfman, *op. cit.*, Vol. 4, p. 360.

13) Robert B. Ekelund, Jr., Robert F. Hébert, *A History of Economic Theory and Method* (Long Grove: Waveland, 2007), p. 421.

14) Stanley L. Brue, *The Evolution of Economic Thought* (Fort Worth: The Dryden Press, 2000), p. 409.

15) Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 30.

16) *Ibid.*, p. 27.

前任者の研究をさらに改善する可能性が最も高い．ただしそれは，観察を最も正確に統計的に記録したものに益々頼る場合である[17]」と主張する．こうしてヴェブレン経済思想は，ミッチェルの企業循環を枢軸とする量的方法に継承されることとなった．しかし同時にミッチェルの経済学の考えが，結果として，ヴェブレンと異なっていったこともまた事実である．

ミッチェルがヴェブレンの考えを独自的に乗り越えようとするに至った理由を解明すること，換言すれば，まさにミッチェルが経済思想史のなかでヴェブレンをどう捕らえているかをみることによって，制度主義が統計研究に基づく実証的傾向を強く帯びるようになっていった点を解明することに繋がる．この点を考察することは，現在でも注目されている制度学派の経済思想の本質を捕らえる上で重要な研究課題であるといえよう．そこで本稿ではミッチェルがヴェブレン経済思想を論じた「思想史におけるヴェブレンの地位」（“The Place of Veblen in the History of Ideas”[18]）を逐次みることを通して，その研究課題に接近することとする．

Ⅱ　思想史におけるヴェブレンの地位

ミッチェルは，ヴェブレンの論文「経済科学の先入観」（“The Preconceptions of Economic Science”）や著作『有閑階級の理論』（*The Theory of the Leisure Class*）を中心に，彼の研究の本質や建設的努力を考察する．まずヴェブレンの若年期を概観する[19]ことによって，ヴェブレンは文化の出が異なっていたがゆえに，アメリカの社会行動を独自に観察できたとする．そこでヴェブレンの論文「近代ヨーロッパにおけるユダヤ人の知的優位」（“The Intellectual Pre-eminence of Jews in Modern Europe”）を引き合いに出す．

「近代科学において建設的に研究するために第一に必要なこと，そしてはっきり言えば不朽の成果を挙げる調査研究をするために第一に必要なことは，懐疑的な考え方である．……

若いユダヤ人は，とにかく知識欲に恵まれていると，あれこれ詳細に検討しようとするのが不可避である学問領域は，異教徒の関心が優位に立っていたり，異教徒の志向が結果をもたらしたりする領域である．これを探求することに関心を持っているところは他にない．……

まさに現在，自国育ちのユダヤ人の描く世界像は，人間の世界像でも神の世界像でも，すべて日付印『紀元前』を残していることである．……その世界像は，個人的，精神的特徴・特質・関係の論理，またはっきり評価できないものの類に関するものである．これらは，事物でも，現代益々増大する機械論的志向が習慣となっている人が研究するものの実体ではもはやない．

天賦の才能のある若いユダヤ人は，心の習慣の観点からみれば依然として柔軟であるので，この機械論的志向という鉄鍋のなかで抑制が解かれると，ユダヤの古風な習慣という土器は，鉄鍋のなかで土器に帰すべき運命ならびに土器に来るべき運命を受ける．……天賦の才能のある若いユダヤ人が破棄する古風な因習的先入観は，自らがいることを知る知的環境に順応していない．しかしそのために非ユダヤ人の過去から，習慣の慣性によって，厳しく監視してきた因習的先入観という非ユダヤ人に特有な継承物は付与されていない．このことは，一方では，慎重で穏健な非ユダヤ人を自己満足させ保守的にさせるし，他方では，慎

17) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969), Vol. Ⅱ, pp. 749, 761.

18) Wesley Clair Mitchell, “The Place of Veblen in the History of Ideas,” in *Veblen's Century: A Collective Portrait*, edited with an introduction by Irving Louis Horowitz (New Brunswick: Transaction Publishers, 2002), pp. 41-63.

19) Cf. *Ibid.*, pp. 41-43.

重で穏健な非ユダヤ人の知的洞察力を鈍らせ，知的側面について言えば固着させるように導く……[20]．」

若きユダヤ人は自らの志向を事実の成り行きから得る．ミッチェルは「自らが管理していない環境の力で懐疑的である[21]」と述べる．ミッチェルのみるところでは，ヴェブレンのような農業に従事しているノルウェー家族は正統なユダヤ家族に似ているものの，ノルウェー家族の文化は近代のアメリカ文化とは異なる．ヴェブレンは，アメリカの世界に足を踏み入れたとき，両親が大切に持ち続けている概念と仲間が受け入れている概念とが相違することに印象づけられた．かくしてヴェブレンが分析したユダヤ人の若者同様，「自らが管理していない環境の力で懐疑的」になったとミッチェルはみる．そこでミッチェルは，結局環境がいかなる問題を選択するか決したと考え，この際大きな役割を演じたのが，家庭と学校から二重の継承物，言語の素養・才能，根深い懐疑的な態度，組織的な思想体系を好んだこと，生物学に関心を持っていたこと，そしてこれらとは異なる衝動を存分に働かせたことであると捕らえる[22]．

またミッチェルは，ヴェブレンが人々の感情をもてあそぶのを好んだとし，こう述べる．

「ヴェブレンは，片方の目で自分の分析がいかに科学的価値を有しているかについて執筆するのが普通であったし，もう片方の目は当惑している読者に向けた．ヴェブレンにとって，この読者は文化的環境が生み出している．そして文化的環境は，標準的な感情の習慣と共に思考の規準を生み出してきた．ヴェブレンは同時代の人に生体解剖を行う．麻酔薬は用いない．各人がそれぞれいかなる感情的反応を表すか分かっている．読者の感情を最小限度に抑えることによって自分の分析が受容されることを容易にすることをもくろむ代わりに，自らの楽しみのために読者を巧妙に刺激する[23]．」

この点を踏まえてミッチェルは，日常茶飯事を仰天させたり滑稽にしたりするヴェブレンの性癖は，その論文・著書に表現されているという．さらにヴェブレンが名言を造るのに長じていた点についてこう述べる．

「『誇示的浪費』は鞭ひものように消費習慣にぴったり合う．現代の慈善行為は『プラグマティックなロマンスの試み』である．近代産業は『過度に生産力がある』ので，繁栄は主導権を持っている企業家が『効率を小心翼々と引き下げる』ことを要する．つまり企業家の生産に対する主な専門的活動は，『資本主義的サボタージュ』を習慣的に行うことである．トラストの普通株は，互いに競争してきた会社を合同することによって形成されるので，『抹消のれん』を表す．個人として，われわれは『金銭上の援助を受けている階級』か『下層住民』のいずれかのなかに居場所を見いだす．いずれかの位階が他を辟易させる．ヴェブレンの英知は誰も何も容赦しない．聖職者が『文化的有機体から不毛の物質の滲出物を放出する公認のはけ口』であるなら，科学者は『気むずかしい懐疑論者』，『生きている計算尺』，『機械製』である[24]．」

ヴェブレンは，人間文化の領域において研究するに当たり，結局経済学を選択した．この選択に与えた一定の影響をミッチェルは論理的に説明する．

チャールズ・R・ダーウィン（Charles Robert Darwin）は自然選択説を模索していたとき，トマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus）の人口論から刺激を受けた．「生物学が経済学に負っていたこの借金の賦払金は，ダーウィン学説がヴェブレンの文化理論に与えた刺激

20) Thorstein Veblen, *Essays in Our Changing Order*, edited by Leon Ardzrooni (New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1964), pp. 226-230.

21) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 44.

22) *Ibid.*, pp. 44-45.

23) *Ibid.*, p. 45.

24) *Ibid.*, p. 46.

が支払った[25]」とミッチェルは述べる．文化は「世間一般の思考習慣[26]」が複合体を形成したものであり，「その思考習慣は個人と社会との特定の関係ならびに特定の機能に関係している[27]．」ヴェブレンはこれらの習慣がどのように発展するか解明する．

ヴェブレンは，生物学的な進化概念に基づいて，思考習慣は個人が関与する活動が作り出すと解する．ほとんどの時間を占める活動，つまり経済的要因が，過去から現在に至るまで変化する環境のもとで文化を作り上げる際，一翼を担ってきた．経済活動が効率的な場合，生計を立てる以外の課業に時間を費やすことができる．しかしながら宗教的・審美的・科学的概念を経済決定論から解放することは部分的にすぎないとヴェブレンは捕らえる．

文化を作り上げる点で，繁殖という生物学的要因が，生計を立てることと同様に影響してきたと考えられる．ヴェブレンの見解によれば，「この繁殖率が及ぼす影響力は，生計を立てる様式が累積的に変化することによって律する思考習慣が累積的に変化する，その変化が及ぼす影響力と比べると僅かであるし疑わしい[28]．」

ヴェブレンは，このように近代制度体系がどのように進化してきたかを中心問題とする．これによって経済学者は，経済学の果たす役目を新たに弁えた．これまで経済学は「富に関わる科学」と定義され，中心問題は価格がどのように決まるかであった．それゆえヴェブレンにとって，経済学者が持つ科学についての概念や科学の問題は時代遅れ，すなわちダーウィン以前であった．ミッチェルはヴェブレンの所説を引き合いに出す．

「科学は，いかなる固有な意味においても，近代的であるなら，（公言されていない）基礎条件と連続した変化の事実をみなす．科学の研究は，過程がどのようであるかに集中するのが常である．この過程の概念の周りに近代科学の研究者は群がるが，過程の概念は連鎖あるいは複合体，連続した変化の概念である．その変化において連鎖の関連は，研究される変化が連続しているおかげで，因果関係である[29]．」

デイヴィッド・リカード（David Ricardo）もジョン・B・クラーク（John Bates Clark）も一貫して連続した変化を論じていなかった．古典派経済学は，架空の定常状態で起こることに研究を限定した．それゆえ正統派経済学は分類学の研究段階にある．ヴェブレンは，経済学は経済制度がどのように進化するかという問題に取り組むことによって，進化論的科学にならねばならないとし，次の見解を披瀝する．

「近代科学は，生活現象を研究する限りにおいて，……発生と累積的変化の問題に専念する．そして因果関係の見地から描写する生活史の形で理論的に明確に述べることに集中する．近代科学が術語の最新の意味で科学である限りにおいて，いかなる科学であれ，例えば経済学などは，人間がどのように行動するかに関連しているから，人間の生活体系を発生論的に研究するようになる．そして経済学においてのように，研究主題が，物的生活手段を扱う際，人間がどのように行動するかである場合，科学は程度の差はあれ広範囲のあるいは限られた計画に基づいて，物質文明の生活史を研究するのは当然である．……すべての人間の文化同様，この物質文明は制度体系である．つまり制度が作り上げ，制度が成長したものである[30]．」

このようにヴェブレンは，経済学者は自らの主要問題を取り違えてきたと非難する．ミッチェルは，この根本的な告発と結びついているのが，経済学者は時代遅れの人間性の概念を持って研究し

25) *Ibid.*, p. 47.
26) T. Veblen, *The Theory of the Leisure Class*, p. 190.
27) *Ibid.*, p. 190.
28) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 48.
29) T. Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization*, p. 32.
30) *Ibid.*, pp. 240-241.

ているという批判であるとし，さらにヴェブレンを引き合いに出す．

「経済理論を一般に受け入れられているように発展させる際常に……研究が関与する人材は，快楽主義的見地から考えている．すなわち，受動的で実質上自動力のない，不変に一定の人間性の見地から考えている．経済学者の持つ心理学的かつ人類学的先入観は，心理学・社会学が数世代前に受け入れた先入観であった．人間を快楽主義的に概念化することは，快楽・苦痛の暗算の名人を概念化するものであり，暗算の名人は同質の小球体のように振動する．幸福になることを望んでのことである．幸福の欲望の領域の周りで人間の位置を変えるが，そのままにしておく刺激に駆られるからである[31]．」

ヴェブレンは，自らの人間性の概念を，ダーウィン，ウィリアム・ジェームズ（William James），人類学の記録に基づいて陶冶した．人間は，ジェレミー・ベンタム（Jeremy Bentham）が主張したように，最高権力を持つ二つの支配者である，苦痛と快楽の統治下に置かれてはいない．快楽・苦痛あるいは満足・犠牲という諸力が人間行動を決定するとは想定しない．それゆえ重要な心理学的範疇は，幸福計算や観念連合ではなく，性向や習慣となる．人間個体は，向性ならびに本能という資質を持って生まれる．ヴェブレンの考えでは，本能は経験によりいかなる修正を受けるか，習慣に発展するかは，結果的には，人間が成長する環境によって決まる．伝統・訓練・教育を通じて，若者は年長者が学習したことを身につけるからである[32]．この点をミッチェルはヴェブレンの所説を引用して説明する．

「累積的に，それゆえ，習慣が作り出すのは慣例・慣習・因習・先入観・行為の構成原理である．これらは人類の先天的素質に間接的にしかさかのぼらないが，これらの習慣的要素が先天的偏見を帯びているかのように，それとほとんど同じ様式で，ある特定の系統の努力を成し遂げることに影響を及ぼすであろう．行為のこの一団の派生的規準や規範と共に，習慣化の同一の訓練が伝えながら生まれるのが一団の累積的な知識である．この知識は，ある程度は事実に即して現象に精通することと，大部分は共同生活体に流布している一定の後天的先入的愛好や先入観を具体化する社会通念から作り上げられている[33]．」

文化は累積的に変化する．近代科学が扱う連続した変化は累積的である．人間行動は経験しているうちに変化する．ミッチェルはヴェブレンの立場に即して「人類の生活史のある時点で人間がどのように行動するか，その説明は，物語の前回分のなかで探し出さなければならないのがほとんどである[34]」と述べる．この主張の根拠として，ヴェブレンの「新たな状況は，それぞれその状況に先んじたものが変化したものであり，原因因子として先んじたものが生み出してきたものしか具体的に表現していない[35]」という考えに着目する．そこでミッチェルは，ある時点の経済制度を当然視し，その制度の作用だけを研究しても，経済学と人間性の関係は理解できないとする．

しかしミッチェルによれば，ヴェブレンは準機械論的経済学の価値を一定程度認めたかもしれないという．制度に潜在する論理を精巧に作り上げているからである．しかしながら制度を認識しているものの，制度が帯びる性質は一時的であることは分かっていない[36]．ミッチェルは，「現在では，理論でも，例えばヴェブレンの賞賛者であるハーバート・J・ダヴェンポート（Herbert J. Davenport）などが人間は利潤を求める欲望が行

31) *Ibid.*, p. 73.

32) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 49-50.

33) Thorstein Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1964), p. 39.

34) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 50.

35) T. Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization*, p. 4.

36) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 51.

動させるのが常であるという明白な仮定に基づいて展開したものは，経済行動に光明を投じる．ただその範囲は，人間は会計室が完全に生み出したという点に留まる[37]」という．結局ヴェブレンは，力学的科学概念をダーウィンの進化論的な生物学を足場に非難するに至る．

ここでミッチェルは，ヴェブレンの方法のもう一つの特徴に注目する．精密科学は，測定あるいは量的に正確であることを重視する．この点に鑑みるとミッチェルは，ダーウィンの生物学は精密科学ではないとし，ヴェブレンも立派なダーウィン主義者であったと捕らえる．

しかしミッチェルは，生活史が累積的にどのように変化するかは，測定によって捕らえ切れないとする．人間史のあらゆる部分について，社会統計が収集され分析できるように保存されていなければならないからである．もっとも最近の変化に関するデータは得られるから，ヴェブレンはこれらのデータを利用することを拒絶しなかったものの，習慣的に行ったことは，正統派経済学者のほとんどと類似しているとミッチェルは結論づける[38]．

ヴェブレンは，このように量的方法を常習しなかったけれども，ダーウィンの見地から人間経験を鋭敏に観察した．「19 世紀に深く巻き込まれていた経済学者に全く無視された多くの問題について，ヴェブレンは集中的に考えた．ヨーロッパの新石器時代，日本の封建制度，オーストラリア先住民の生活，そして同様に時間や空間において現在のアメリカからかけ離れた多くのことは，ヴェブレンの問題にまさしく関連するようにみえた[39]．」

ヴェブレンは，先行の経済学者とは異なり，取り分け本性と文化をめぐるより最近の心理学に基づいて人間がどのように活動するか考察した．そこでミッチェルは行動を研究する二つの方法を指摘する．一つは人間を客観的に研究するものである．脳の内部で起こっていることを知ろうとはしない．もう一つの方法は意識の内部が重要であるとし，その器官がどのように作用するか考えるものである．ミッチェルは次の見解を披瀝する．

「論理的に言えば，意識をめぐる思索家の概念は，三段論法における一つの前提を作り出す．前提は暗黙的であるのが普通である．手順はこの時点では『演繹的』である．もっとも手順は心理学的前提から『帰納的』に引き出す前に行われていたであろう．それに続くであろう手順が，結論を『帰納的』に検証することである[40]．」

ミッチェルによれば，ヴェブレンは，古典学派に追随して人間がどのように行動するか理論的に考え出すものの，正常の行動ではなく現実の行動を説明しようとした．ヴェブレンが導き出した結論は，事実に一致すると想定されるし，観察によって検証する余地がある．またヴェブレンは，人間性の最新の適正な概念を有し，心理学上の前提の帯びる性質に注意し，その前提を明確にした．ともかくこのような心理学上の前提にヴェブレンの経済理論が基づいている範囲では，古典派と比べても科学的に人間行動を説明しているといえるとミッチェルは分析する[41]．

したがってミッチェルは，社会科学者は人間行動を扱っていると解し，人間性の概念を明確にするにつれて，自己認識にそれだけ貢献することができると主張する．この方向における貢献をミッチェルは，ヴェブレンがダーウィンやジェームズの習慣・本能心理学を用いて，広範な領域の人間活動を説明した点に見いだす[42]．

ミッチェルは，ヴェブレンの方向に沿って，人間行動のもっともらしい推論が事実に一致するかテストする必要があると認識する．この点で，ミッチェルは考えを事実に基づいてテストすることあ

37) *Ibid.*, p. 51.
38) *Ibid.*, p. 52.
39) *Ibid.*, p. 52.
40) *Ibid.*, p. 53.
41) *Ibid.*, p. 53.
42) *Ibid.*, p. 54.

るいは帰納的検証を求める[43].「研究は初めから仮説に基づいた結論をテストする機会を与えるような方法で組み立てられるべきであるという考えは，その当時周知の事柄ではなかった[44].」この点で古典学派は，帰納法は経済学においては使用範囲が限定されている道具であると侮ったとミッチェルは捕らえる.

ミッチェルによれば，上記の事例とヴェブレンは余り異なっていない．異なるとすればただヴェブレンが正常の行動ではなく現実の行動を扱っているという点しかないという．ヴェブレンの研究はダーウィンに似ている．すなわち思弁的体系である．それゆえミッチェルは，ヴェブレンの研究は「……より徹底的かつ管理された研究に基づいて彼の研究を究極的に実証することを待ち受けている[45]」と述べる.

このようにミッチェルは，ヴェブレンの人となり・問題・見地・方法をみてきた．これを踏まえミッチェルは，ヴェブレンが達した建設的な結論を考察する.

ヴェブレンは，ブロンド類型の起源から営利企業の将来の展望に至るまでの生活史を研究した．このなかでミッチェルは，ヴェブレンは現代世界を見渡して産業的雇用と金銭的雇用がいかに異なるか示した点に注意する．つまり財を作る仕事と金を儲ける仕事との相違であるし，言い換えれば機械過程と営利企業との相違でもある.

アダム・スミス（Adam Smith）はその著『諸国民の富』（*Wealth of Nations*）において貨幣は媒介にすぎないと指摘した．ベンタムの心理学はこの見解を，人間にとって真に重要であるのは快楽・苦痛しかないとして一層強力にした．貨幣は商品・サービスを得る手段であるということについて，ジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill）はこう述べた.

「手短に言えば，社会組織において貨幣ほど取るに足らないものであるはずはないのが本質である．重要であるとすれば，それは時間や労働を節約するための考案品の役に扮することにおいて以外ない．貨幣がなくても，敏速かつ便利ではないものの行うことができることを，貨幣はより敏速かつ便利に行うための機械である．そして他の多くの種類の機械と同様に，変調を来すと独特の明確かつ自律的な影響力を及ぼすにすぎない[46].」

また経済学者は，価値・分配を論ずる際，貨幣を研究するための道具と捕らえる. アルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall）は次の見解を披瀝する.

「〔貨幣〕は，中心であり，この周りに経済科学は群がる．……貨幣や物質的な富は，人間が努力する上での主たる目標とみなされるからでもなければ，経済学者が研究するための主たる題材を与えるとみなされるからでもなく，現在この世界で人間の動機を大規模に測定する一つの便利な手段だからである[47].」

行動を規定する現実の諸力は，マーシャルの説明によれば，満足と犠牲である．貨幣は，相反する動機の力を測定するのになくてはならない道具にすぎない．これはマーシャルの人間性の概念と一致する．ベンタムの様式に倣って考え，人間は一種の複式簿記を習慣的に行うとする．貨幣を使用しても，経済行動の帯びる本質的性格は変わらないと考える[48].

ここでミッチェルは，マーシャルの心理学概念を踏まえ，ヴェブレンの概念に目を転じる．ヴェ

43）ジョン・M・クラーク（John M. Clark）は「『企業循環』は，企業循環研究に一新紀元を開いているばかりでなく，経済研究の帰納法が発展する上で画期的な出来事でもある」と述べる．John M. Clark, *Studies in the Economics of Overhead Costs*（Chicago: University of Chicago Press, 1962）, pp. 386-387.

44）W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 54.

45）*Ibid.*, p. 55.

46）John Stuart Mill, *Principles of Political Economy: with some of their Applications to Social Philosophy*（New York: Augustus M. Kelley, 1961）, p. 488.

47）Alfred Marshall, *Principles of Economics*（London: Macmillan and Co., Limited, 1910）, p. 22.

48）W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 56-57.

ブレンにとって，貨幣は社会組織において最も重要である[49]．貨幣は思考習慣を作り上げるからである．

ミッチェルはこの分析を考慮しつつ，ヴェブレン思想の若干の特徴を指摘していく．

「〔第一に〕社会において，金を儲けることが生活する上で成功しているか否かの一般的に容認された試金石となっている場合，張り合おうとする生得の性向は金銭的歪みを呈する．……高価にみえる財を好むし，どんなに心地悪くても変化する様式に遅れないようについていくし，愚かで心身を疲労させる社会の軽薄な言動を受け入れるし，費用がかかるがゆえに上品だとする嗜みを子供に教える．美的感覚はドル記号が刻印されている．……大金持ちの生活様式といわれているものにできる限り接近する．無駄を不快にする製作本能を持って生まれるけれども，顕示的浪費から満足を得る．……顕示的閑暇を習慣的に行ったり，あるいは妻や奉公人に自らのために顕示的閑暇を行わせたりする．……貨幣は，社会組織において取るに足らないものであるはずはないのが本質である．その社会組織の内部の渇望は金銭的規準の特徴を深く有しているからである[50]．」

第二に，ミッチェルは，合理性は金を儲けることで教え込まれるという．貨幣を使用することは心の習慣を生み出すから，ベンタム，ミル，マーシャル，クラークの人間行動の考え方に対する心理学上の基礎をもっともらしくする．

第三に，ミッチェルは，ヴェブレンのいう二組の経済活動，つまり金を儲けることと財を作ることとの関連の特異性を指摘する．金を儲けることは財を獲得するための手段であるのに，実際には金を儲けるために財を作る．ヴェブレンはこの矛盾をはらんだようにみえる事態を詳述する．その典型例として挙げるのが，危機と不況である．その原因は，ヴェブレンの分析によれば，企業にあり産業にはない．営利企業は，人間の要求を満たすためではなく，利潤を求めて運営されているとするヴェブレンの企業循環の考えを，ミッチェルは次のように説明する．

「好況時には，価格は上昇し，利潤は高く，企業家はふんだんに金を借り，生産を拡大する．しかしそのような繁栄が自ら墓穴を掘る．貸付を裏づける実質的担保は，予想純利益であり，これは現行利子率で資本化されている．利子率が上昇する場合，繁栄期においてのように，一定の純利益の資本化価値は低下し，貸付はそれほど安全ではなくなる．そのことの他に，純利益は発生期の活況の楽観的な時期に期待されていたほどではないことが判明する場合が多い．価格はいつまでも押し上げられ得ない．企業を行う費用は上昇し利潤を不当に奪う．銀行準備金は減少し，追加信用を得るのは難しくなる．利潤が失われていることに高金利が加わると，債権者は不安になる．このような緊迫した状況では，いくつかの著名な活動体が財政困難に陥ることにより，これまで非常に堂々としているようにみえていたのだけれども，不安的な構造が転覆する．清算して欲しいという要求が生じ急速に広がる．企業は支払いを迫られると，債務者に圧力をかけて借金を皆済させるからである．かくして繁栄は恐慌となる．次いで起こるのが不況である．手短に言えば，営利企業は繁栄すると，必ずや企業的な失敗を犯す．この失敗が恐慌を引き起こすし，これらの失敗の損害を受けているのが共同社会全体である[51]．」

ミッチェルは，ヴェブレンのいう上述の消化不良の急性の差し込みに加えて現在の秩序の慢性病を論じる．現在機械過程の生産力は法外であるか

49）ミッチェルは，その論文「経済理論における貨幣の役割」（“The Role of Money in Economic Theory”）の冒頭で，「近頃，経済理論には様々な傾向があるが，なかでも，経済を分析する上で貨幣の使用を中心的特徴にする傾向ほど，私にとって期待できるように思えるものは他にない」（W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 149.）と述べる．

50）W. C. Mitchell, “The Place of Veblen in the History of Ideas,” p. 57.

51）*Ibid.*, p. 59.

ら，技術者に思い通りにさせると，市場は財の流れに圧倒されるであろう．企業家は供給を需要に合わせるために，産業効率を正常以下に保つ，すなわち資本主義的サボタージュを習慣的に行う．それゆえ「北アメリカ大陸的規模で生産を準備することが許されるなら，現在の知識を用いて，産業の経常産出量を２，３倍にするだろう[52]」が，これを行うことは許されない．企業家は，産業の将帥としては無能である．産業革命の初期には産業の指導者であったけれど，科学技術が発展したことにより，企業家は産業を圧迫するようになった[53]．

そして営利企業の状況は不安定になりつつある．近代生活が生み出す思考習慣は，企業取引が基礎を置く思考習慣を蝕んでいるからである．技術者集団は物理科学の観点に，企業家集団は自然権，取り分け所有権の見地に立つ．したがって技術者は生産高を限界にまで増大する計画がなぜ許されないのか理解できない．さらに工場労働者は，器具・機械を用いて労働するがゆえに，因果の見地に立つ物理科学と類似した破壊的思考習慣を獲得し始め，それが拡大しつつある．工場労働者は，「懐疑的になり，事実に即するようになり，唯物的になり，超道徳的になり，非愛国的になり，不信心になり，自然権の形而上学的な機微が分からなくなりがちである[54]．」ミッチェルは「それで現在の社会秩序は，不在所有権の利益のために，営利企業が支配しているけれども，人類の大部分にはもはや適切でもなければ望ましくもないようにみえる時が近づいているようである[55]」とヴェブレンの考えを取りまとめる．

ヴェブレンは，現在の制度に代わる新しい制度構造を詳述していないが，上述の点を踏まえ，科学技術者が産業を管理することを期待する．いずれにせよ，ヴェブレンの考えでは，制度は新しい思考習慣を生み出し，この思考習慣は新しい制度に具体化し，累積的に永久に変化するとミッチェルは捕らえる[56]．

これまでの議論を踏まえてミッチェルは，ヴェブレンは最後まで静かな不信心者であったとし，次の見解を披瀝する．

「……ヴェブレンは，自分自身の研究ですら執念深く疑い続ける．ダーウィンの見地は，人間の心のなかで破棄されるはずである．本能・習慣心理学は，人間性のある別の概念に地位を譲る．一団の事実に基づく知識は，累積的に成長し続け，特にあてもない好奇心は，このデータを系統立てる新たな方法を見いだす[57]．」

Ⅲ　ヴェブレンの制度主義の伝統

ここでミッチェルの所説を整理しつつ検討してみることとする．

ミッチェルは，ヴェブレンの若年期を概観することによって，彼は文化の出が異なっていたがゆえに環境の力で懐疑的になったとみる．

ヴェブレンは，人間文化の領域において経済学を選択して研究を進めた．累積的な因果関係の問

52)　*Ibid.*, p. 60.
53)　*Ibid.*, pp. 59-60.
54)　*Ibid.*, pp. 60-61.
55)　*Ibid.*, p. 61.

56)　ミッチェルは，ヴェブレン同様，環境によって社会因習を懐疑的に事実に即して考察しようとした集団として，ドイツ歴史学派を取り上げている．正統派経済学の相対性を看取したものの，それに代わる科学的学説は生み出さなかった．またカール・マルクス（Karl Marx）に対するヴェブレンの見方を紹介する．マルクスは，ヴェブレンの考えでは，文化を分析するものの，ベンタムから引き出した浅薄な心理学やゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）から引き出した非現実的な形而上学の影響を受けていた．マルクスは，企業家の金銭的思考習慣と機械過程が教え込む賃金労働者の思考習慣が異なることと，それらの思考習慣の生成・発展過程を見落とした．またヘーゲルの影響を受けて，社会進化をある目標に向かう知的連鎖と考えた．ミッチェルは，このような伝統的分析への固執がみられることは，社会理論における文化的ずれであるとし，このずれをヴェブレン流に制度的に取り扱うことができるとする．――*Ibid.*, pp. 61-62.
57)　*Ibid.*, p. 62.

題に専心した．経済制度の進化をダーウィンの進化論的生物学に依拠して解明した．「富に関わる科学」と定義する正統派経済学は，ダーウィン以前のものであった．それゆえ正統派経済学は，架空の定常状態で起こることに研究を限定し，分類学的性格を帯びていた．この点との関連において，経済学者は時代遅れの快楽主義的な人間性の概念を有していると批判した．

ヴェブレンは，性向や習慣を重視している点で，自らの人間性の概念をダーウィン，ジェームズ，人類学の記録に基づいて構築したとミッチェルはいう．文化は累積的に変化し，人間行動は経験を重ねるうちに変化すると考えた．そこで正統派経済学のように，ある時点の経済制度を当然視し，その制度の作用だけを研究しても，人間性は理解できないとする．

しかしミッチェルによれば，ヴェブレンなら経済行動をある程度解明しているから，正統派経済学の価値を一定程度認めたかもしれないという．

ここでミッチェルは，ダーウィンの生物学は，測定してもいなければ量的に正確でもないがゆえに精密科学とは言えないとし，この見地からヴェブレンは立派なダーウィン主義者であったと捕らえる．この点でミッチェルは，方法をめぐるヴェブレンと正統派経済学との近似性を看取する．

しかしミッチェルの見解によれば，ヴェブレンは，通常の人間行動ではなく現実の行動を説明しようとした．それゆえヴェブレンが導出した結論は，観察によって検証することができる．本性と文化をめぐる最新の習慣・本能心理学の概念に基づいて科学的に人間活動を考察した．そこでミッチェルは，ヴェブレンの方法をさらに推し進めるためにも帰納的検証の必要性を認める．換言すればミッチェルは，ダーウィンの本能・習慣心理学は，これとは別の人間性の概念に取って代わられ，データを系統立てる新たな方法が見いだされるはずであると確信する．

ヴェブレンは現代世界を見渡して，産業と企業との相違を重要視した．アダム・スミス，ベンタム，J. S. ミル，マーシャルとは異なり，貨幣は思考習慣を作り上げるという根拠に基づいて，貨幣が社会組織において最も重要である点を見抜いた．

またヴェブレンは合理性は金を儲けることで教え込まれると考える．そして企業が産業に従属させられている点を詳述する．この理解に基づき，急性の差し込みともいえる企業循環を説明する．さらに現在の秩序の慢性病も論じる．現代機械過程の生産力は法外であるから，企業家は資本主義的サボタージュを習慣的に行う．企業家は産業の将帥として義務は果たしていない．

この観点からミッチェルは，ヴェブレンが営利企業の状況は不安定であると考えることに着目する．産業と企業との思考習慣が益々対立しつつあるからである．そして因果の見地に立つ工場労働者の破壊的思考習慣が拡大しつつあるからでもある．こうしてヴェブレンは現在の社会秩序の不健全性を指摘するに至る．

みられるようにヴェブレンは，制度は新しい思考習慣を生み出し，この思考習慣は新しい制度に具体化し，累積的に永久に変化するとミッチェルは述べる．

このようにミッチェルは，ヴェブレンの人となり・問題・見地・方法をみて，これらの諸点を考慮しつつ彼の達した結論の内容を説明した．

ここでまずヴェブレン思想の本質をなす方法論の理解を手掛かりに，ミッチェルのヴェブレン論の解明を試みたいと考えている．ヴェブレンの方法論は概ね次のように説明できよう．

ヴェブレンによれば，経済学の状況はどうしようもなく時代遅れで，経済学に近代科学の資格は与えられない．近代科学は進化論的である．進化を原因過程の見地，つまり中立の非人格的な一連の原因と結果の見地から述べる．原因と結果の連鎖が累積的性質を帯びているからである．ヴェブレンはこのようにダーウィンの方法論的原理を理解した．近代科学を進化論的でダーウィン主義的科学あるいはダーウィン以降の科学とみなす．進

化論的経済学は，文化が成長する過程に関して，あるいは過程それ自体の見地から述べる累積的な一連の経済制度に関して理論を立てなければならない[58]．ヴェブレンはこう述べる．

「ダーウィン以降の科学が先んじていたものとの対照によって引き立つ特性は，力説点を新たに分与していることである．それによって因果関係の過程，つまり一次的原因と確定的結果との間の不安定性や過渡期が研究する上で首位を占めるようになった．極致に代わるものである．極致においては因果的結果はそのままの状態に留まるようになるとかつては推定されていた．見方がこのように変化したことは，突然でもなければ破滅的でもないのは当然であった．しかしこの見解の変化は，近頃，近代科学が実質上連続した変化の過程の理論を立てるようになりつつあるまでになった．そして連続した変化は，一連の累積的変化とみなされているし，自己継続的あるいは自己増殖的で最終的限界点を有していないと理解されている．原基の起源と確定的結果を問題とすることは，近代科学のなかでは失効している．そのような問題は，考察するようにとの要求を科学者の働きによってことごとく失いそうである．近代科学は，自然の法則，つまり因果関係のゲームの成文化されたルールに専念するのを止めつつある．そして起こったことと起こっていることに専ら関与している[59]．」

さらにダーウィンの進化論的生物学においては，何らかの意図，目的，意向はない．進化的過程は無目的である．ヴェブレンが考える累積的変化は意図されたものではない．

ミッチェルも本論でみたように，ヴェブレンの方法論の本質を正確かつ的確に掴んでいる．

そこでヴェブレンは，自身の独自な方法論に基づき，制度がどのように進化するか分析しようと試みる．

ヴェブレンの考えでは，因果的な質である制度体系の変化は，選択的順応である．人間の制度と人間の性格の進歩は，最適思考習慣の自然選択ならびに個人が環境に強制的に順応させられる過程に帰せられる．制度の変化は，最適の気質を賦与された個人を選択し，新しい制度を形成することを通して個人の気質や習慣を変化しつつある環境に順応させるのを助長する．つまり選択的過程は，既存の制度環境が遂行する安定したタイプの気質と形質との間の選択，もしくは人間の思考習慣が変化しつつある環境に順応するものである[60]．

ヴェブレンは研究を進めていくうちに，制度の変化をめぐって，思考習慣が新しい環境に順応するという見地の方を益々重視していくこととなる．環境が変化することは，ヴェブレンの所説では，人々が生計を立てる様式が変化することであるし，そもそも科学技術の変化が引き起こす．グルーチーは，「ヴェブレンの解釈によれば，制度とこれを埋め込んでいる文化は，ゆっくり時間をかけて，科学技術の変化に応じて変化する[61]」と

58）T. Veblen, *op. cit.*, pp. 56-77.
ヴェブレンはまたこう述べる．
「個人の経済生活史は手段を目的に適応させる累積的過程である．この過程は継続するにつれて累積的に変化する．行為の主体者もその環境もどの時点においてもすぐ前の過程が生み出している．……この点において個人について言えることは，個人が生活している集団についても言える．経済変化はすべて経済共同体が変化することである．物的事物を利用する共同体の方法が変化することである．変化は，結局，思考習慣が変化することである．これは産業の機械過程が変化することについてさえ言える．若干の物的目的を達成するための一定の手段は，思考習慣，つまり手順の習慣的方法がさらに成長することに影響を及ぼす環境である．そうなるのは，追求する目的を達成する方法をさらに展開するための出発点であり，達成されるよう追求される目的をさらに変えるための出発点である．」*Ibid.*, pp. 74-75.

59）*Ibid.*, pp. 37-38.

60）T. Veblen, *The Theory of the Leisure Class*, pp. 188-190.

61）Allan G. Gruchy, *Contemporary Economic Thought: The Contribution of Neo-Institutional Economics*（Clifton: Augustus M. Kelley・Publishers, 1974）, p. 21.

述べる．ヴェブレンは，科学技術の要素を重視し，近代社会の原動力を科学技術に求める[62]．「資本主義は手工業体制が作用することから出現する．科学技術の規模や効率が増大することを通して出現する[63]．」新しい科学技術は，経済環境や生活様式に重大な変化をもたらす．この変化は新しい思考習慣の発展の原因となる．この新しい思考習慣は，既成の習慣や制度に取って代わられる．制度の変化は，新しい物的環境によって，古い思考習慣が習慣的に廃止されたり，新しい習慣に置き換えたりされることを通して起こる．この先端的訓練が求める日常の事実の習慣的理解の見地は異質であり，これによって伝統的規則を評価し直したり修正したりするに至る．ヴェブレンは次の見解を披瀝する．

「日常の知識ならびに信念に関わる新しい術語は，古くからの規範に一致しないと，新しい規範や規準を強要したり固定させたりする．新しい規範や規準が帯びる性格は，伝統的な見地とは相容れない．……この動揺させる訓練は，日常の経験が身につくようにするので，本質的に，そして最も直接的に，生活の物的状況がなす訓練である．緊急事態であり，日々生活の物的状況を扱う際，人間につきまとう．これらの物的事実が執拗であり断固としているゆえである．そして知識や信念の範囲や方法は，人間が日々物的に関わる上で，人間に強要されるので，習慣的に利用することによって，同様に他のものにも及ぶ．それでまた物的経験という直接的領域の外側に存在する不確定的事実に関係するすべてにおいて，知識や信念の範囲や方法に影響を及ぼす[64]．」

ヴェブレンは，制度がどのように進化するか議論する際，物的な生活状態が強いる訓練，つまり人々が生計を立てる様式が思考習慣に強制する訓練があるとする[65]．支配的な生活様式もしくは経済環境が，世間一般の思考習慣に影響を及ぼしているとし，科学技術が生活様式の変化を引き起こすと捕らえる．経済変化の源泉として新しい科学技術に注目する．

ところが，ミッチェルは科学技術的変化は重視しない[66]．「人間は，金銭的土台の上でお互いに取引するという意識的習慣を，なぜこれほど広範に拡張してきたかは些細な問題である[67]．」制度の変化を科学技術的変化よりむしろ経済上の利点から説明する．ヴェブレンと異なり，機械技術が文化に及ぼす影響は考慮しない．

ミッチェルはヴェブレンがブロンド類型の起源から営利企業の将来の展望に至るまでの生活史の研究を試みた点を指摘しながら，その制度変化の内容は説明していない．制度の長期にわたる歴史的変化の理論を展開することはできないと考えているからである．まして制度が変化する上で，ヴェブレンが科学技術の要素に着目したことには触れてすらいない．科学技術よりむしろ経済的要因を重要視しているからである．そこでミッチェルは，ヴェブレンが指摘した当時にみられた経済体制の差し迫った特異的な問題，つまり産業と企業との相違に起因する問題を解説するに留まっている．

これがミッチェルのヴェブレン論の実体の一端である．つまり，まさにミッチェルのみる「思想史におけるヴェブレンの地位」なのである．換言

62) Cf. T. Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization*, p. 326.

63) T. Veblen, *The Instinct of Workmanship*, p. 282.

64) Thorstein Veblen, *The Vested Interests and the Common Man* (New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1964), p. 9.

65) Cf. T. Veblen, *The Instinct of Workmanship*.

66) マコーミックはこう述べる．
「ヴェブレンは経済学においてダーウィンの方法を求めた．このことはおそらくヴェブレンの最も重要な貢献であろう．しかし……ヴェブレンが得た他の洞察にも追求する価値のあるものが多い．これらの洞察のなかで主要なのは，ヴェブレンがいかなる経済においても科学技術が中心的地位を占めていると主張することである．科学技術は，社会の最も重要な資産である．」K. McCormick, *op. cit.*, p. 127.

67) Wesley Mitchell "Money Economy and Modern Civilization," edited by Malcolm Rutherford, *History of Political Economy*, Vol. 28, No. 3, Fall, 1996, p. 354.

すれば，ヴェブレンの経済思想をミッチェル流に継承・発展させた一つの形である．ミッチェルは，変化を引き起こす無数の原因のもつれを解きほぐし[68]，制度の長期的変化を分析することはできないと考えている．そこで「より徹底的かつ管理された研究に基づいて彼の研究を究極的に実証する[69]．」つまりヴェブレン思想の思弁性を排除して，統計的・量的視点から現代における特異な問題に専心したと考えられる．この点を本論でみたミッチェルの所説を考慮しつつ掘り下げていこうと考えている．

さて，ミッチェルは当時の心理学を概観している[70]．ヴェブレンのいう製作本能の概念は，エドワード・L・ソーンダイク（Edward Lee Thorndike）の心理学とは相容れない側面があることを見いだした．さらに本能をめぐってソーンダイクとジョン・B・ワトソン（John Broadus Watson）との考え方に懸隔があることも了解した．このことから達した一つの結論は，適切な心理学を追い求めても生産的な結果に至らないことであるように思える．「本能・習慣心理学は，人間性のある別の概念に地位を譲る[71]」と述べている所以であろう．ミッチェルがソーンダイク，ワトソン，さらにジョン・デューイ（John Dewey）らを含め学んだことは，経済学とは人間行動の科学であると定義する程[72]，現実の行動を研究する重要性であったといえよう．正統派経済学者のように基本的に快楽・苦痛の心理学にしたがって人間はどう行動するはずであるか考察するのではなく，経済過程における現実の行動を研究しなければならないと考えた[73]．

この人間行動をミッチェルは統計的方法を用い観察する．多量の行動に関するデータを扱うべく，統計的手法を採用するに至った．統計分析を社会現象という大集団に適用することで，この大集団を効率的に分析し，サンプリングの過程を通して大集団間の関係を確立する[74]．経済データを量的あるいは統計的に処理する方法を広く利用し，経済行動を客観的かつ量的に分析する．量的研究においては，大量現象から開始し，現実の市場からデータを引き出し，社会現象として観察された市場行動を理解する．そして客観的過程を測定する変数の関係をめぐって理論を立てる．そこでミッチェルは，経済学は将来量的側面上でより豊かに発展すると考え，「量的に研究すると制度問題を特に好むものである．制度は行動を規格化し，それによって統計的処理を容易にするからである[75]」と述べる．量的方法は，伝統的理論に代わって制度を強調することにより，経済学を一変させるとする[76]．行動を観察することに基づいて，理論を経験的に検証する．量的系統に沿って広範な実証・統計分析を利用しつつ経験的研究を推進しようとする．

従前の経済学は，ミッチェルの考えでは，演繹

68）W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 298.

69）W. C. Mitchell, "The Place of Veblen in the History of Ideas," p. 55.

70）Wesley C. Mitchell, "Human Behavior and Economics: A Survey of Recent Literature," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 29, No. 1, November, 1914, pp. 1-47.

71）W. C. Mitchell, "The Place of Veblen in the History of Ideas," p. 62.

72）Wesley C. Mitchell, "The Prospects of Economics," in *The Trend of Economics*, edited by R. G. Tugwell (New York: Alfred A. Knopf, 1924), p. 25.

73）人間行動の性質についてのミッチェルの考え方は，ソーンダイクに類似している．行動は，本能の見地から説明することはできない．考慮すべきことは，本能それ自体ではなく，経験の結果としての本能の間で作られる組み合わせである．行動を規定するものとしての本能的要因の組み合わせである．組み合わせは，他人との交流を通して作られる．――Cf. W. C. Mitchell, "Human Behavior and Economics," pp. 6-11; W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, pp. 169-171.

74）W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. II, p. 809.

75）W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 30.

76）*Ibid.*, pp. 20-37.

科学であり，快楽・苦痛を計算することに基づいていた．この計算を量的に検証する見込みはほとんどない．つまり快楽や欲望の強さを主観的に解釈することは，ミッチェルの考えでは，理論家がデータに付け足すものであり，データから取り出すものではないので，形而上学的である．現実の市場からデータを得るのではない．観念としてのみ存在する個人にしか関心を寄せない．それゆえ仮定した前提に基づく推論の結果と現実は齟齬を来す．架空の個人あるいは仮説上の個人に基づく個人行動の理論から始めるのではなく，制度の見地から個人がどのように行動するか説明する．

このようにミッチェルは，新古典主義の非現実的な観念や方法論を批判した．しかしまたダーウィン主義に則っているヴェブレンの方法の一定の説得力・潜在力を賞賛しているのは確かであるものの，それを現実に適用する上での限界も感じている．ヴェブレンの研究の欠点，つまり経験的には確正できない思弁に依存している点を看破した．ヴェブレンの考えを，ミッチェルはこう捕らえる．

「ヴェブレンの一般的な研究方法は，古典派経済学者に近い．その意味は，世界について自分自身の仮定と一般知識とに基づいて物事を推論し，自分が導き出した結論を直接観察したり，より入念に大規模な観察をして確かめるようなことはほとんどしないということである．もっとも大規模観察は統計学によって可能となる[77]．」

ミッチェルは経験的見地から，ヴェブレン思想の思弁性[78]を踏まえ次の見解を披瀝する．

「社会統計学は……物理科学の革新的特徴を多く有している．社会統計学が示しているのは，事実に関する知識，分析技術，および結果の精緻化が真っ直ぐに進歩していることである．数学的に系統立てて述べることになじみやすい．集団現象を予測することができる．客観的である．……社会組織において累積的に進歩するであろう方法を展開するという課題に貢献する[79]．」

ミッチェルはヴェブレンの思想から思弁性を排除しなければならないとした．思弁をプラグマティックにテストし，形而上学的である経済学を改善しなければならないと考えた．

換言すれば，ミッチェルは「思弁的な類の経済理論は，取るに足らない……[80]」という．ベン・セリグマン（Ben Seligman）によれば「……ヴェブレンが統計的検証を利用していないことについて遺憾の意を表した[81]．」本論でみたように，「ダーウィンの見地は，人間の心のなかでは廃棄されるはずである．本能・習慣心理学は，人間性のある別の概念に地位を譲る[82]」と述べ，ヴェブレン経済学のダーウィン以降の進化論的様相を棄却した．ミッチェルらの「……制度主義者たちは，『進化』という穏やかなダーウィン以降の意味に逃げ込んだ．そこでは進化という術語は，変化以外のことはほとんど意味しなかった[83]．」それゆえクリスチャン・コーズ（Christian Cordes）は，「ダーウィンの生物進化の説明モデルは，……人間の進化した認識枠組みに基づく文化進化の動学を説明することには不向きである[84]」と主張する．事実ジョン・ラーツィス（John Latsis）は，「……ヴェブレンの進化論は彼に続く制度主義者たちが社会

77) W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. Ⅱ, p. 686.

78) W. C. Mitchell, "The Place of Veblen in the History of Ideas," p. 55.

79) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, pp. 52-53.

80) *Ibid*., p. 302.

81) Ben Seligman, *Main Currents in Modern Economics* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1990), p. 179.

82) W. C. Mitchell, "The Place of Veblen in the History of Ideas," p. 62.

83) Geoffrey M. Hodgson, *The Evolution of Institutional Economics: Agency, Structure and Darwinism in American Institutionalism* (London: Routledge, 2004), p. 392.

84) Christian Cordes, "Turning Economics into an Evolutionary Science: Veblen, the Selection Metaphor, and Analogical Thinking," *Journal of Economic Issues*, Vol. 41, No. 1, March, 2007, p. 149.

進化のモデルを作ることを可能とするに足りる道具を与えない……[85]」とすら結論を下している．

こうしてミッチェルは行動と統計を重要視し，独自の思想的枠組みのなかで経済過程・経済行動を経験的に研究する．これは同時に結果としてヴェブレンの考え方から離脱することにも繋がっていった．

したがってミッチェルは，「盲目的に模倣したヴェブレンの信奉者ではなく[86]」，その「……本能・習慣心理学とダーウィン説の重要な要素を拒絶……[87]」する．「……ヴェブレンが所有権を主張した道の上で彼を越えて前進……[88]」しようとした．「ヴェブレンは，正統派理論を甚だしく破壊した．この破壊は，ミッチェルが量的データを膨大に収集したことによって補完されることになった．……ある意味では，景気循環に関するミッチェルの研究は，ヴェブレンの論拠を立証するものとして思い描かれた[89]．」この意味で，ロバート・B・エケルンド二世（Robert B. Ekelund, Jr.）とロバート・F・エベール（Robert F. Hébert）が「……ミッチェルの研究は，ヴェブレンの研究を拡張したものであったが，ヴェブレン自身は，遂行もしなければ，この上なく役に立つと思ったものでもなかった．……ミッチェルの『制度経済学』が進んだ方向は，ヴェブレン自身の概念とは特に類似していなかった[90]」と述べた意味が深長であることも首肯できるであろう．

85) John Latsis, “Veblen on the Machine Process and Technological Change,” *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 34, No. 4, July, 2010, p. 605.

86) J. Dorfman, *op. cit.*, Vol. 3, p. 455.

87) G. M. Hodgson, *op. cit.*, p. 268.

88) A. G. Gruchy, *op. cit.*, p. 45.

89) B. Seligman, *op. cit.*, pp. 179-182.

90) R. B. Ekelund, Jr., Robert F. Hébert, *op. cit.*, p. 442.